

直轄改修・洪水痕跡、 大川ダムを訪ねる



大川ダム 会津若松市大戸町・南会津郡下郷町

- ①道の駅あいづ 湯川・会津坂下
- ▼
- ②上宇内薬師堂（国重文、洪水痕跡）
- ▼
- ③泡の巻橋 ～直轄改修はじまりの地～
（阿賀川下流狭窄部、捷水路群）
- ▼
- ④戸ノロ十六橋水門（治水、利水、戊辰戦争史）
- ▼
- ⑤大川ダム（監査廊、操作室、資料展示室、昼食）
- ▼
- ⑥せせらぎ公園（阿賀川洪水、向羽黒山城跡）
- ▼
- ⑦道の駅あいづ 湯川・会津坂下
（ポンプ車格納庫、防災・河川環境学習）

主催/特定非営利活動法人会津阿賀川流域ネットワーク
 後援/国土交通省北陸地方整備局 阿賀川河川事務所
 福島民友新聞社、福島民報社
 道の駅あいづ湯川・会津坂下、芦ノ牧観光協会
 協力/一般社団法人 北陸地域づくり協会



（編集）
 特定非営利活動法人会津阿賀川流域ネットワーク
 〒965-0856 福島県会津若松市幕内東町10-12
 TEL 0242-27-2921 FAX 0242-27-2922

令和4年10月23日発行

国土交通省北陸地方整備局 阿賀川河川事務所
 〒965-8567 福島県会津若松市表町2-70
 TEL 0242-26-6441 FAX 0242-29-2776

阿賀川・日橋川・湯川河川改修洪水年表

天文5年(1536)6月、「白髭の水」発生
 慶長16年(1611)8月、会津大地震で山崎新湖出現
 元和9年(1623)八田野まで八田野堰完成
 寛永13年(1636)阿賀川が氾濫し神指城二ノ丸土塁と掘跡が欠損する
 天保9年(1836)戸ノ口堰が若松城下まで完成
 明治13年(1880)戸ノ口十六橋水門完成
 明治15年(1882)安積疏水開削工事完了
 明治21年(1888)7月、磐梯山爆発、裏磐梯湖沼群が出現する
 大正2年(1913)8月、阿賀川堤防決壊、死者・行方不明13名
 大正3年(1914)猪苗代第一発電所運転開始
 大正7年(1918)猪苗代第二発電所運転開始
 大正10年(1921)2月、内務省阿賀川改修事務所創設
 大正10年(1921)から昭和13年(1938)阿賀川狭窄部で3本の水路開削(捷水路)工事が実施される
 大正10年(1921)猪苗代第四発電所建設に伴い切立橋が鹿尻島本線から運ばれ架けられる
 昭和16年(1941)7月、阿賀川、日橋川氾濫
 昭和22年(1947)9月、阿賀川、湯川氾濫
 昭和31年(1956)宮川放水路完成
 昭和33年(1958)9月、会津地方で大水害発生
 昭和33年(1958)湯川放水路完成
 昭和46年(1971)大川ダム実施計画調査着手
 昭和52年(1977)4月、大川ダム本体工事着手
 昭和56年(1981)日橋川堤防改修完成
 昭和57年(1982)9月、会津地方洪水発生
 昭和62年(1987)10月、大川ダム完成
 平成14年(2002)7月、床上22戸、床下83戸の水害
 平成23年(2011)7月、会津地方西部で豪雨
 平成27年(2011)9月、会津地方南部で豪雨
 令和元年(2019)10月、会津地方で豪雨、過去2番目の降水量となる
 令和3年(2021)12月、阿賀川直轄改修100周年記念行事が開催される



阿賀川とは

阿賀川は、福島県南会津郡南会津町の栃木県境荒海山を源流に、会津盆地の中央を流れ、日橋川や只見川の流れを集め、新潟県に入ると阿賀野川に名を変え、新潟市の日本海に流れる流域面積が全国8位の大川です。会津藩では、「揚川」(あががわ)とは本来只見川を差し、日橋川に合流すると「揚川」(あがのかわ)と呼んでいました。その呼び名が阿賀川の元になっています。阿賀川を含む阿賀野川は、全国10番目の長さ、流域面積は8番目、年間流出量は全国2番目の大河です。

日橋川とは

裏磐梯の桧原湖を始めとする湖沼群の水を集める猪苗代湖の水は、戸ノ口から日橋川に流れ、会津盆地中央で阿賀川と合流します。川の呼び名は、江戸時代までは、流域の地名で呼ぶことが多く、日橋川とは『新編会津風土記』に、磐梯町大寺に「新橋」(にいばし)があり、下流の落合に「新橋」(しんばし)が架けられ、文字が同じだったため混乱したことから、大寺の橋を「日橋」としたので、日橋川と呼ぶようになったとあります。流域には、東京の発展を支えた電力を供給している猪苗代第一発電所から第四発電所のほか、日橋川発電所と金川発電所があり100年を経過しています。

湯川とは

会津若松市の東山町の上流、安藤峠を源流とする川で、東山温泉を通ることから、湯川と呼ばれています。蒲生氏郷が若松に入る以前は、川底が黒かったことから「黒川」、東山の羽黒神社の下を流れることから「羽黒川」と呼ばれ、城下町は「黒川」と呼んでいました。氏郷は、「車川」と「押切川」の二本があり、黒川の元の流れだった「車川」を外堀にし、本流を南だけにして、城下町を「若松」にしました。城下町会津若松を流れる生活に密着した河川として親しまれています。



阿賀川河川事務所の役割

会津盆地を流れる阿賀川、湯川、日橋川を主として、洪水氾濫の発生を抑え、安心安全な生活が出来るように堤防などの整備をするとともに、河川の自然再生を進め貴重な生物の保護や川に親しみを持ってもらい理解してもらう学習の場の提供、河川協力団体との連携などがあります。

豪雨による流量の増加に対しては、流量調節や適切な水の利活用を進めるため、大川ダムの管理、湯川可動堰の管理、内水氾濫を防止する身神川排水機場の管理、排水ポンプ車をはじめとする災害対策車の整備があります。

阿賀川河川事務所の歴史

大正10年(1921)2月1日に内務省仙台土木出張所阿賀川改修事務所が設置されます。昭和18年(1943)4月1日に内務省仙台土木出張所阿賀川工事事務所に名称変更され、平成15年(2003)4月1日には、国土交通省北陸地方整備局阿賀川河川事務所に名称変更されています。

出張所等では、

- 大正10年(1921)に真木工場、雨屋工場建設
- 昭和5年(1930)に金上工場建設
- 昭和8年(1933)に大川工場建設
- 昭和18年(1943)に大川工場が神指工場に名称変更し、金上工場が廃止されます
- 昭和23年(1948)に神指工場が神指出張所に名称変更し、金上出張所が設置。真木工場が真木出張所に名称変更されます
- 昭和27年(1952)に真木出張所が廃止
- 昭和32年(1957)に金上出張所が廃止し塩川出張所設置
- 昭和47年(1972)に神指出張所が移転し、北会津出張所に名称変更されます
- 昭和63年(1988)4月11日に大川ダム管理支所設置
- 平成13年(2001)国土交通省北陸地方整備局阿賀川河工事事務所に改称
- 平成15年(2003)北陸地方整備局阿賀川河川事務所に改称



河川協力団体

河川協力団体制度は、自発的に河川管理活動を行う民間団体を支援するもので、河川法第58条の8第1項の規定により河川協力団体として指定されます。

阿賀川は、古くから流域住民とのつながりが強く、川の背後地に住む人たちが河川を管理し、川からの恩恵や自然環境の健全な維持にあたっていました。阿賀川流域の歴史・風土・文化・生活を通して、阿賀川の水環境を理解し、川から学び、河川管理や河川環境の保全、河川活動の指導者育成支援の活動に取り組んでいる次の団体があります。

特定非営利活動法人

会津阿賀川流域ネットワーク

平成16年(2004)4月に福島県から特定非営利活動法人として認証を受けた団体で、水環境の保全ために阿賀川流域住民とともに、阿賀川流域の治水、安全確保、河川管理活動、地域づくり支援の活動をしています。主に、阿賀川、日橋川、湯川流域の堤防除草と点検支援、川に関する活動をしている団体への助成、水環境に対する広報活動、総合的な学習の支援をしています。

阿賀川・川の達人の会

平成5年(1993)3月に設立した団体です。川の持つさまざまな機能を生かし、子どもたちや川に親しむ人々に、阿賀川を身近な憩いの場として利用するための術、遊び、文化等を掘り起こす「体験」を通して伝承、伝達していく川の達人を養成することを目的に発足し、活動をしています。活動を通じ、阿賀川を身近に感じてもらう環境教育や治水、川の歴史、洪水、堤防・ダムの防災機能について、子ども達に親んでもらう河川の総合学習の支援をしています。会は「会津めだか塾」の卒業生や講師経験者、川に興味を持つ人で構成され、職種や年齢もさまざまです。



阿賀川河川改修の始まり

古くから阿賀川は洪水との戦いでした。最も激しかった洪水は、阿賀川が会津盆地に入り現在の会津若松市と会津美里町の境界となっていてところを流れていた「鶴沼川」(鶴の首のように曲がっていたことに由来)が、天文5年(1536)の「白髭の水」洪水で現在のように会津美里町本郷から北の湯川村へ流れを変えた会津最大の洪水です。

その後「洪水の歴史年表」にあるように、度々洪水に見舞われています。大正2年(1913)8月27日、台風によって会津地方の堤防288箇所が決壊し、死者・行方不明13名、1006戸が浸水しています。その後、大正時代に阿賀川の流路は、会津若松市大戸町上三寄の馬越頭首直下において、大戸町の住民によって、河川内の大岩をダイナマイトで爆破し、それまで右岸、東側の大戸町雨屋寄りを流れていた流路が、会津美里町大石寄りに変化しました。大正7年(1918)には、福島県によって阿賀川の改修計画が作成され、翌年には内務省によって喜多方市慶徳町山科地点の改修が始まります。

大正10年(1921)には、内務省で喜多方市慶徳町真木の泡の巻橋付近と会津坂下町袋原の捷水路の直轄工事が始まります。また、会津若松市大戸町下雨屋の字村北に雨屋工場が建てられ、上雨屋字余松地内に見張小屋が建てられ除石工事(低水路整備)が始まります。袋原の工事は、昭和13年(1938)に完成し、現在の流れのように約6kmが0.5kmの河道になります。旧河川は今でも残され、川前のヘラブナの釣場としても知られています。

その後、昭和31年(1956)7月梅雨前線による大雨で、阿賀川、湯川、宮川が大氾濫をしています。これを契機として、昭和32年(1957)から支川日橋川の捷水路工事に着手することとなりました。

慶長会津大地震と山崎新湖

慶長16年(1611)8月21日の朝8時頃に発生した慶長会津大地震は、推定で震源が柳津町西山から三島町滝谷周辺、震度6強、マグニチュード6.9から7.2、会津の死者が約3700人とされる直下型地震でした。『会津旧事雑考』には、「会津川(阿賀川)の下流で山崩れ、榎(喜多方市慶徳町真木)を塞ぐ、それゆえ四郡(会津・耶麻・河沼・大沼)が水漬し」そして「疎速に当たらせたが三日流れず、再び崩れ水が相湛え、山崎新湖と呼ぶようになる。寛永の末(1645年)まで続いた」という。その大きさは「東西三十五町(3.8km)、南北二十町(2km)の大きさ、13村浸水」したという。その大きさは約15平方km、裏磐梯の桧原湖(10.8平方km)より大きかった。会津盆地西縁断層帯が動き、真木付近が土砂崩れとなり下流部が競り上がったためです。

この時、若松城天守閣は傾き使用不能となり、柳津の虚空蔵堂、新宮熊野神社長床、塔寺立木観音堂など約二万戸が倒壊しました。山崎新湖の水を抜くのには約50年を要しています。

阿賀川洪水と向羽黒山城跡

会津盆地南東端に位置する会津美里町本郷の向羽黒山城跡は『会津旧事雑考』によると、天文5年(1536)の「白髭の水」洪水で現在のように会津美里町本郷から北の湯川村へ流れを変えた会津最大の洪水の直後に築かれています。鶴沼川の旧河川の南側に位置しています。向羽黒山城跡は、永禄11年(1568)に葦名(蘆名)盛氏が会津美里町の岩崎山に築いた山城です。天文5年の流路変更に伴って、『本郷邑向井羽黒古壘之図』には、旧河川より南側の部分に、外構えという外堀と土塁と山城の曲輪の土塁が描かれています。また、地名として、その内側に城下町の上町、十日町、本郷町、六日町、三日町など地名があり、町屋が置かれていました。

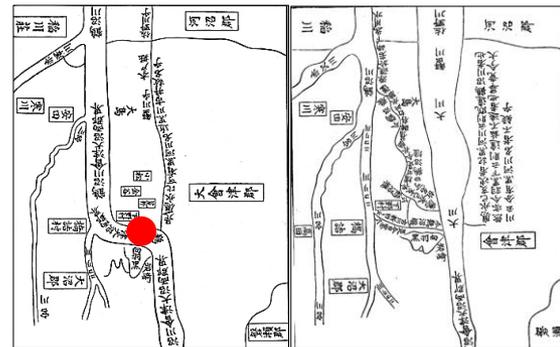
その後、会津の領主だった伊達政宗は、会津に入るとすぐに、要害と向羽黒に行った記録が『伊達天正日記』にあります。また、蒲生氏郷以降に登場する礎石が至る所にあり、二ノ曲輪に入る虎口には石垣が積まれていること、直線的な土塁や堀跡などからも大改修をしています。さらに、この城の最後の城主となる上杉景勝・直江兼続によって、大規模な堅堀や幅30mとなる堀切なども残されています。

その後、1600年の徳川家康による会津討伐命令により、更に手が加えられたと見られますが、戦いには使用されず、上杉氏が米沢に移封となり破城となっています。

洪水痕跡がある上宇内薬師堂

会津坂下町上宇内にある上宇内薬師堂には10世紀前半に造られた国重文の薬師瑠璃光如来坐像が安置されています。湯川村の勝常寺とともに会津五薬師の一つとなっています。

また、薬師堂には、戦国時代の永正15年(1518)頃の坂下洪水により浸水した、洪水痕跡の柱4本があります。この堂が現在地に移動したのは、江戸時代前半の元禄4年頃(1691)であり、元は、現在地から南約200mにある川西公民館の、南側にありました。



天文5年(1536)の白髭の大水『会津旧事雑考』阿賀川が会津美里町や会津坂下町を流れていたものが現在のように北に流れるようになりました。



●の位置が、現在の湯陶里の場所になります。黒色が土塁になり、外構え(外堀)の土塁が御用地方面にあることが分かりますが、発掘調査では確認できませんでした。『本郷邑向羽黒古壘之図』個人蔵



戸ノ口十六橋

猪苗代湖から自然に流れ出る戸ノ口地点(日橋川上流端)は、江戸時代から二本松裏街道として、若松から猪苗代までの最短ルートとして利用され、橋脚部分を水流で流されないよう石で積んだ十六橋がありました。明治13年(1880)に完成した安積疏水の水門は、猪苗代湖の水位調節に利用されています。

戊辰戦争の慶応四年(1868)8月22日、母成峠で敗戦した会津藩と新選組らは、西軍の進行に對し夕方4時には十六橋を壊そうとしますが、薩摩藩の川村隊が進行し会津藩を銃撃し渡河します。そして、西軍約二千名が、現在の県立会津レクリエーション公園内に土佐藩、戸ノ口北側に薩摩藩が陣取ります。会津藩は、22日に滝沢本陣で松平容保公より出撃命令を受けた白虎隊士中二番隊37名と新選組、水戸藩、農民を急ぎよ集めた約600名が強清水東の戸ノ口原に出撃しました。会津藩では、街道を挟んで北と南に分かれて挟み撃ちにする作戦をとりますが、翌日23日早朝から始まった戦いでは、会津藩の鉄砲は白虎隊の射程300mに對し、西軍は七連発銃を含むもので射程が800から1200mあり、武器は大きく異なり白虎隊が奮戦するも突破されます。その陣地跡が8か所残されています。

十六橋には、会津藩によって戸ノ口堰の取り入れ口が造られ(現在は発電所の用水施設を利用)、寛永18年(1641)河東町八田まで完成、天保8年(1837)には若松城下まで引かれて町北・高野町や湯川村の水田1865haを潤っています。

安積疏水は、明治12年(1879)に始まった日本初の国直轄農業水利事業で、オランダ人技術者ファン・ドールンが政府の命で実地調査を行い、疏水の開削が実行されました。工期約3年、延べ85万人を動員、40万7千円(現在の約400~500億円)延長52kmの水路が明治15年(1892)8月に完成。約3,000haの水田が誕生し、郡山発展に貢献しています。平成28年(2016)4月日本遺産に認定。



戸ノ口、十六橋

大川ダム

大川ダムは、芦ノ牧温泉の南、会津若松市大戸町と南会津郡下郷町にまたがる阿賀川に造られた洪水操作、流水の正常な機能維持、かんがい用水、水道用水、工業用水、揚水式及びダム式発電をする多目的ダムです。大川ダムの上流には多目的ダムは無く、流域面積が大きいため水の流入量が多いことから、貯水池の若郷湖の大きさは1.9平方kmと広く、総貯水容量は5,750万m³あります。

昭和33年(1958)9月の阿賀川流域の大水害を受けて、昭和46年(1971)に実施計画調査に着手、昭和52年(1977)4月に大川ダム本体工事が始まり、昭和62年(1987)10月にダム本体が完成します。

重力コンクリート及びロックフィルの複合型ダムで、高さ75m、堤頂の長さが406.5m、堤頂の幅が6mあり、若郷湖を下池として、夜間電力を利用して上池の大内ダム湖へ揚げ、落差約400mを利用して最大100万kwの発電を電源開発株式会社(下郷発電所)でしています。また、大川ダム下流右岸においても東北電力株式会社(新大川発電所)において、最大2万1千kwの発電もしています。

令和元年(2019)10月12日の令和元年東日本台風は、ダム完成後最大の流入量毎秒2,405m³を記録しました。大川ダムでは、完成後初めてとなる事前放流を実施し、貯水位を台風襲来までに常時満水位より21m低下させました。結果、ダム下流に流す流量を最大で毎秒834m³低減する洪水調節操作ができました。これにより、馬越観測所(会津若松市大戸)では河川水位を約1.6m低下させる効果があったと推測されます。

また、平成28年(2016)5月から8月の湯水では、81日間下流へ水田のかんがい等の用水として補給をし、旱魃対策に貢献しています。



神指城跡

会津若松市神指町本丸にある、関ヶ原の戦あった1600年に築かれ未完成となった大規模な平城です。地形図から計測すると大きさは、二ノ丸の堀跡を含めると南北約750m、東西約710mあります。面積は堀跡を含めると約55ha、若松城跡の約2倍の面積で、周りは水田、西に阿賀川があります。

大手口は東側に位置し、北東の鬼門には樹齢約600年の「高瀬の大木(ケヤキ)」(国指定天然記念物)があり、その木を基点に『会津旧事雑考』に上杉景勝家臣、執政の直江兼続が北極星を基準に夜測量し町割までしました。城の北、現在の大江戸温泉の地には、上杉謙信の遺骸を納めた御堂(みどう)が建てられたが未完成に終わっています。『塔寺八幡宮長帳』に「神指地区(会津若松市神指町)の十三村を強制撤去、領内から八万~十二万人を動員し、家臣の割普請によって工事をした」と書かれています。慶長5年(1600)3月18日から工事を開始しましたが、6月10日徳川家康の上杉討伐命令に備え工事を中止し、動員された人を田島、白河方面など国境の防御にあたらせました。本丸部分は門まで完成したとされますが、上杉氏の米沢移封前に破城されます。石垣は本丸部分に積まれていることが確認できますが、二ノ丸までは積まれていません。『神指原古城之図』(個人蔵)は、江戸中期に描かれた図で、黒で表した土塁に折れの横矢掛りが描かれています。本丸部分の土塁の折れは、今でも確認できます。築城途中で中断された大規模な城としては全国的に珍しく、築城途中に作られたスロープも残されています。

寛永13年(1636)大川の洪水によって、二ノ丸南西の土塁と堀が洪水によって欠損しました。その時、如来堂村は西側から現在地に移転。阿弥陀如来堂が建てられていたことから如来堂村といい、新選組奮戦地としても知られています。



昭和38年撮影